

わが国における保育環境の歴史的変遷について 8 楽器 (2)

中島寿子 (聖丘教育福祉専門学校) 内藤知美 (お茶の水女子大学)

田代和美 (お茶の水女子大学) 柴崎正行 (東京家政大学)

はじめに

明治30年代『京阪神連合保育会雑誌』(明治31年)『婦人と子ども』(明治34年)(大正7年から『幼児の教育』)が相次いで創刊される。またこの時代はピアノ、オルガンの国産が本格化する時代でもある。本報告はこの明治後期から昭和初期にかけての、園環境としての楽器の変遷を探ることを目的とする。

研究の背景

文献の調査・分析による。保育実践については『京阪神連合保育会雑誌』『幼児の教育』の他、各地の幼稚園記念誌、都道府県の保育史、教育史等を中心に調べた。『日本幼稚園史』『日本幼児保育史』『幼稚園教育百年史』その他の文献も参考にした。

結果と考察

【1】明治後期(明治30年代～40年代)

《ピアノ》明治40年代になると新たピアノの記述がある。明治40年から宣教師マツダで始まる盛岡幼稚園にピアノがあり(『日本幼児保育史』p.68)、善隣幼稚園(宣教師マツダが神戸に創立)の園舎見取図(明治42年移転～昭和初期頃迄)にも遊戯室にピアノとある(『保育学年報1976年版』p.79)。明治42年頃清輝幼稚園にステンドピアノ寄贈(『岡山県保育史』p.157)、愛珠幼稚園(大阪)も明治42年それ迄のピアノを廃しグランドピアノ(1000円)を購入(『九十年小史』p.22)とある。

《オルガン》オルガンについてはさらに記述が見られるようになる。東京女子師範学校附属幼稚園では当時の在園生(明治35～38年)によると「毎日課業の終りにはオルガンに合せて、各組とも別々に「今日のけい吉はすみました」と云ふ唱歌を歌って」いた(『幼児の教育』33-2)。若松幼稚園(福島)明治31年度卒園生も部屋にオルガン一台あり、毎日「おてつないで」ばかりを歌っていたと回想している(『百周年記念誌』p.70)。上浦幼稚園でも明治35年当時オルガンに合わせ歌ったと卒園生が回想し(『百周年記念誌』p.17)、幸手幼稚園(埼玉)(明治44年創設)第一回卒園生もオルガンがあったと回想している(『保育学年報1976年版』p.39)。双葉幼稚園では、明治44年幼児と先生が入れ替わり幼稚園ごっこをし「△△のオルガで合唱」した(『婦人と子ども』11-8)。

足利幼稚園には創立(明治36年)早々ドイツ製のオルガンが寄附された(『写真集幼児保育百年のあゆみ』p.84)。当時オルガンもかなりの貴重品で、高崎幼稚園が明治40年に定めた出火の際の持出物順序に、御勅語原本、園長用筆筒、園旗に続き「第四風琴」とある(『高崎幼稚園百年史』p.47)。

京阪神地方では『京阪神連合保育会雑誌』(以下『京阪神』と略す)26号(明治44年)掲載の豊園幼稚園(京都)の写真に保育室でオルガンを弾く保育士の姿があり、明治41年神戸幼稚園での神戸市保育会ではプログラムに神戸幼稚園児の風琴独奏(同22)とある。明治39年井原幼稚園はオルガンを購入した(それ迄は手風琴)(『岡山県保育史』p.157)。

《太鼓、楽隊》その他には、松本幼稚園の保育日誌(明治35年)に「太鼓ヲ代ル、ツカ」とある(『百周年記念誌』p.268)。京都府師範学校附属幼稚園の参観記(明治38年)にも「遊戯室の一隅に遊戯道具・他の一隅には大きな太鼓を置いてこれも自由にたたくことを許してありませう」とある(『京阪神』16)。「楽隊」という記述もあり、双葉幼稚園では明治45年子ども達が楽隊ごっこもしており(『婦人と子ども』12-8)、神戸幼稚園も明治45年「楽隊も始まれば、芝居も始まるという風で」「尤も幼児の好みます事は楽隊遊」と報告している(『婦人と子ども』12-7)。

《結果のまとめと考察》明治期後半もピアノはごく限られた園にあるのみだが、オルガンはかなり普及してきている。子どもが使う楽器には太鼓があった。『日本幼稚園史』では「外遊戯の自由遊びの道具に太鼓を挙げ「幅の狭いごく軽いものでただこれを叩いて庭を歩いた。拍子をとるとか遊戯に使ふとかいうのではなく、ただ叩くのが面白くてた、くという有様であった」とある(p.31

1)が、京都附属幼稚園の太鼓とは違うようだ。「楽隊遊び」という記述も見られるが、ブルーノ会第四年報告(明治32-33年)中、幼稚園での模擬遊びの例に「楽隊」「衆見相集り、種々玩具等ヲ以テ楽器トシ、多ク行ハル楽隊ノ譜ヲ奏ス進行ス」とある(『幼稚園教育百年史』p.94)ことから、模倣遊びの一つであったと考えられ、特に楽器はなかった可能性もある。

【2】大正期

《ピアノ、オルガン》東京女子師範学校附属幼稚園を見てみると、大正5年の参観記によれば「二の組」にオルガンがある。朝「共同室」に集まりピアノにあわせて歌う。「一つの業にとりかゝる時間の始まりにオルガンの賑やかな曲をひくと小供等は「同じしとな」り「せめて二分でも三分でも静かにして小供の精神を落ち着かせたいという希望でやって居ります」と保育士は語る(『婦人と子ども』16-10)。大正7年には時計の音をピアノで表し何時かあてるといふ時計遊びも紹介される(『幼児の教育』18-6)。このピアノは「グランドピアノ」で震災焼失(同23-12)したが、すぐにピアノ・オルガンは寄附された(同24-1)。

その他、日白幼稚園にも大正5年設立当時、遊戯室にピアノ「作業室」にオルガンがある(同16-8)。上浦幼稚園の保育士(大正4年～)もピアノはなくみんなオルガンだったと回想する(『百周年記念誌』p.23)が、大正13年には各組が「ピアノの合図に整列」「遊戯の時間となり」「ピアノにつれて」行進するとある(『幼児の教育』24-7)。

京都女子師範学校附属幼稚園の平面図(大正7年～)にも遊戯室に「ピアノ」(『百周年記念誌』p.56)保育室にオルガンがあり(同p.57)。大正末頃の長崎県女子師範学校附属幼稚園の平面図にも各「教室」にオルガン「遊技室」にピアノがある(『百年のあゆみ』p.37)。
《ピアノ購入への保護者の支援》当時、大変高価であったピアノの購入のため大変な努力をした園もあった。清心幼稚園(前橋)では楽器はオルガンとリズム楽器だったためピアノ購入が計画され(1200円くらい。当時土地付建物が買えた)、幼稚園母の会、後援会、その他関係者と共に立教大のオーストラと呼んで音楽会を開く(大正12年)寄附金を集める等して購入した。群馬県内の教育関係施設で一番目だった(『図説教育人物事典』中巻p.22)。鳥根県師範学校附属幼稚園では、大正3年結成された保護者会の寄付で遊戯室を建築後、大正12年には卒園生の会が結成され評議員の篤志金200円と保護者会の積立金でピアノ1台を購入し寄付した(『保育学年報1976年版』p.107)。福岡幼稚園も大正11年音楽会を催し、収益で設備の完成を希望しておりピアノを第一に挙げている(『幼児の教育』22-11)。三重県松阪幼稚園購入の楽器も明治44年太鼓大一個、大正3年ヴァイオリン一個、大正6年蓄音機一台(寄贈)、大正14年ピアノ一基(寄贈)オルガン一台(寄贈)、昭和2年中オルガン一台(寄贈)、昭和4年蓄音機一台(内拾得寄贈)とあり「かなりの地元父兄からの寄附によって支えられ」当時としては珍しい蓄音機や「ピアノ・オルガン等高価なものはほとんど寄贈品であり、当時の園児の親の経済力の大きさを裏付けている」(『三重県幼稚園史』p.67-71)。

《太鼓その他の打楽器》松本幼稚園では大正5年「楽隊道具」を初めて子どもに貸して遊ばせた。その太鼓は今も幼稚園にあるが、その他にどのような楽器があったかは不明という(『百年誌』p.368)。写真では今の鼓笛隊の太鼓と同様の物のようであるが、明治期の保育日誌にある「太鼓」との違いはこの資料ではわからない。大正7年第八回福島県保育会でも喜多幼稚園が男児の雨天の室内遊びの例に楽隊ごっこを挙げた(『幼児の教育』17-12)。兵庫県龍野市の龍野幼稚園に残る御大典奉祝(大正4年)の楽隊の写真でも男児が大・小太鼓、ラッパ、アコーディオンを持っている(『100周年記念誌』p.17)。同年「運動会遊戯順序」にも昼食時に「楽隊」とある(同p.18)。京都女子師範学校附属幼稚園大正7年当時の記録にも遊戯室に兵隊用具とともに楽隊用具があった。

「合図」に使う打楽器の記述もある。上浦幼稚園の当時の保育士(大正12年～)によると毎日「太鼓の合図でお部屋に入り静かなり

ズムにあわせて、一時眼を閉じ」ることをした(『幼児の教育』p.25)。また、大正13年の手記(24-7)にはリョの組(鈴のことか?)笛の組、太鼓の組とがあり「太鼓の組のお帰り時間が来た。太鼓がなる」とあることから、各組で決められた楽器の音を合図にしていたことが窺える。輪王寺附属日光幼稚園卒園生(大正12年大園)の回想にも「開始の合図はトライアングルというのか三角形をした金属の棒で」とある(文部省『幼稚園八十年のあゆみ』p.26)。**《屋外に持ち出されるオルガン》**龍野幼稚園では大正5年卒園生の回想によるとオルガンを運動場に出して遊戯することもあった(『100周年記念誌』p.17)。(現)愛媛大学附属幼稚園では大正期によく園外保育を行い、小使さんがオルガンを車についで野原まで運んでくれたという(『日本幼児保育史』第3巻p.65)。松本幼稚園にも屋外でオルガンに合わせ遊戯する子守学校の写真がある(『写真集幼児保育百年のあゆみ』p.92)。

《聴覚練習・聴覚調査のための楽器》大正1年、神戸幼稚園長望月には京阪神連合保育会で「子供はピアノやオルガンを奏するのが好き」だが「大人用では大き過ぎて指が足り」ないとして聴覚練習のための家庭・幼稚園用の小さいピアノを紹介した(『京阪神』31)。翌年の『婦人と子ども』にも神戸幼稚園保育母が聴覚練習用の楽器を製作中とあり(13-5)その後関西教育博覧会幼稚園の部の報告の中に「神戸幼稚園・第三聴覚練習(楽器子供用)」とある(13-8)。望月は「科学的・実証的」な幼児研究を連合保育会の研究テーマとし、様々な研究の中心となった。大正3年には高田調の「オルガン」での幼児声域調査を報告した(『京阪神』33)。その後、大阪、京都の保育会からもオルガンの他、ピアノ、太鼓、笛、鈴、人声等での調査結果が報告された(同35,37)。大正9年大阪市幼稚園共同研究会主催の玩具展覧会では「聴覚を練習する玩具」に、笛、豆太鼓、鳥笛、ラッパ、ハモニカ、手風琴、鈴、オルゴール、鉦、鳩ゴッポ、子供蓄音機等、「美的感情を両用する玩具」に、風琴、笛、ハモニカ、諸楽器類等が挙げられた(調査園児4874名中100名以上所持:ラッパ、ハモニカ、笛、50名以上所持:太鼓、ピアノ、蓄音器、大正琴、10名以上所持:琴(同45))。

《蓄音機の普及》大正期には蓄音機が園環境としても整備される。麹町幼稚園は、蓄音機はピアノオルガンより優れレコードは様々な音が組合わさり動作遊戯の伴奏によく、ビクターの「教育的レコード」だと何度も繰り返し使うのにもよいとしている(『婦人と子ども』17-7)。大正6年レベール記念講演会でも「音楽の味ひ方」と題し蓄音機による名曲の説明があった(同17-4)。前出の喜多方幼稚園の雨天の室内遊びにも男女共通のものに蓄音機を聴かせたりそれによって運動したりとある(同17-12)。

《結果のまとめと考察》遊戯室にピアノ、保育室にオルガンという形が一般的になってきている。高価なピアノ購入には保護会会の協力がかなり大きかったことも窺える。オルガンを外に運び遊戯をしていた園もあるが郊外保育の影響と思われる。持ち運びやすさという点ではピアノよりも便利である。楽隊遊びについては、今の鼓笛隊のような道具がある園もあった。楽器に聴覚練習の意味を探る保育もあり、その調査結果はいわゆる楽器以外にも音の出る玩具で遊んでいたことを示唆する。

太鼓以外の打楽器の記述もあり、ピアノ、オルガンの伴奏を蓄音機にかえる幼稚園もある。大正末には上川の律動遊戯の影響でオルガンの伴奏でマチや保育母の叩く打楽器のリズムに合わせ動くことが重視されるようになる(『日本幼児保育史』第3巻p.84)。上川は蓄音機はピアノ、オルガンに比べれば購入しやすく子どもも喜ぶと述べている(『幼児の詩・音楽・舞踊』p.230)。小林宗作のオミツ運動も大正14年開始され(『幼稚園教育百年史』p.141)、幼児が先生のピアノ、太鼓、シバル等に合わせ、太鼓を打ったり動作したりすることを提案した(同p.264)。この流れは昭和に入っても続く。

【3】日々和日常具

《子ども自身が楽器を使って遊ぶ》『幼児の教育』における東京女子師範学校附属幼稚園の様子をあげる。昭和2年:雨の日に林の組(4-5歳)が音楽会を開く。楽隊はピアノ(あき子)太鼓(五郎)小太鼓(千代子)ドラ(守雄)かね(ひろ子)(27-7)。ピアノ、蓄音機をきく(27-8)楽隊遊びをきく(シバル、トライアングル、太鼓)(27-11)ともある。昭和3年:楽隊遊びは音のききわけ遊びの一つでもあると述べられている(28-2)。そしてレコードの他に「ピアノ」(筆者注:当時流行した自動ピアノ)をきくともある。さらに楽隊遊びに合わせ遊戯(28-8,9)行進(28-10)ともある。「運動会」と題した写真(28-

11)もある。運動会の模型の周りに子ども達(おそらく全員男児)が立ち、首からバンドで太鼓をぶら下げた子、小太鼓をつけた子、小さなシバルを手にした子がいる。昭和7年:「5月の一週間」によると、池の組(5-6歳)では「太鼓や、タマリ等の楽隊道具」を持って、本校へ遊びに行くと言うと「特に男の子は大喜び、可成り重い太鼓を首に掛けた、楽隊屋さんを先頭に」小学生の真似をして行進し、クローバーの草原で楽器を鳴らしゲームを応援したり、太鼓を叩いて大声で歌ったり、それにあわせて皆も歌ったりした(32-6)。昭和12年:「年上の幼児にはオルガンを与へて玩具の世界から音楽の世界に移したい」(37-7)。昭和14年:「出征・戦場」と題した人形芝居が紹介され、道具に太鼓、ピアノ、ハモニカ、レコード、楽隊がある(39-8,9)。昭和15年:ピアノ(40-2)やオルガン(40-6)の音の強弱でまりの場所を探る「まりかくし」が紹介されている。

このように、この頃から子ども自身が楽器を使ったり、他の子がそれをきく、それに合わせて動くという記述も繁頻に現れる。附属幼稚園以外の園の劇遊びの記述にもそれが窺える。昭和15年千葉女子師範学校附属幼稚園:人形劇の伴奏に楽器(『幼児の教育』30-6)。昭和13年麹町富士見幼稚園:劇遊びの伴奏にレコード、ピアノ、唱歌隊等(38-6)。自由遊びに「幼児同志の楽隊をつけたり、又ピアノの伴奏にタマリ、手拍子だけでも非常に喜び、見てゐる者も、飛んでゐる者も実に愉快なようで」と保育母が述べる(41-1)。東洋英和幼稚園:「幼児のオケストラ」と題された写真に指揮の子、タマリ、トライアングル、太鼓等を叩く子(『日本幼児保育史』4巻p.11)。

《この時期のピアノの購入》愛珠幼稚園:昭和7年グランドピアノ寄贈(『九十年小史』p.23)清輝幼稚園:昭和10年新たにピアノ購入(岡山県保育史p.157)大阪女子師範学校附属幼稚園:紀元2600記念にグランドピアノ購入(『ふよう』p.67)福岡幼稚園:昭和2年母の会がピアノ寄贈(27-2)高崎幼稚園:昭和11年「山葉平型ピアノ」寄付され「ピアノ寄附披露式」(『百年史』p.97)千葉女子師範学校附属幼稚園:昭和16年新築の際、遊具場に幼児用オルガン6台ピアノ1台、遊戯場にピアノ、保育室にオルガンや蓄音機を備える(31-8)東京市竹町小学校附属幼稚園:昭和16年新設の際の購入品にピアノ(山葉一号)1(650円)楽隊用具1(48円)大正幼年唱歌1(2.5円)律動遊戯(2.5円)(31-6)。(前号(31-5)にレベール館に赴くとある)龍野幼稚園:卒園生(昭和7年卒)回想「当時はハカシなマタピアノのリズムに合わせ、元氣よく四肢を踏んで歌った」(『100周年記念誌』p.23)。

《レコード、ラジオの普及》昭和11年から数回に渡り氏原と膳貞規子が吹き込んだレコードの手約募集の広告が『幼児の教育』に掲載される。昭和7-10年頃にはラジオも普及し(『日本幼児保育史』第4巻p.170)倉橋もラジオ使用を勧めている(35-5)。昭和16年には東京女子師範学校教授戸倉ハルの幼稚園遊戯(レコード番号も)が掲載される(例えば41-8,9)。東京市西櫻花小学校附属幼稚園:ラジオ体操が一般的になったのでレコードをかけてみると付添いまでリズムに心を奪われ一緒に体操した(33-3)郡山幼稚園:昭和11年入園式で君が代の唱歌をレコードで演奏(36-3)京都平安幼稚園:昭和14年「遊びの後かてをひいた薄暗い部屋で、静かなレコードと共に休息するのは、又尤も大切な健康教育」(39-8,9)岩手県女子師範学校附属幼稚園:昭和13年年長レコードコンサート(軍歌物)(38-1)

《昭和16当時の楽器の普及率》昭和16年「本邦保育施設に関する調査」から調査対象園の楽器所持率を抜粋は以下の通り。蓄音機:94.6%(公100.0%私62.6%)オルガン:93.8%(公100.0%私84.3%)ピアノ:44.4%(公72.1%私72.2%)ラジオ:16.9%(公19.7%私16.7%)楽隊遊び:6.4%(公9.8%私9.3%)蓄音機とオルガンが公立幼稚園では100%であるのが注目値する。オルガンに比べれば少ないにしても、この頃になるとピアノも半数近くの園にある。

《結果のまとめと考察》昭和に入ると子どもが楽器を使って遊ぶ、それを聞く、それに合わせて動くといった活動が目立つ。またレコードとも導入されたラジオは大変魅力的なものであったようでそれらが楽器伴奏に代わることもあったようである。そして戦争突入という背景から軍歌等の視聴にも利用された(音感指導には空襲の危険が生じると敵機を知るための耳の訓練をする目的もあったという(『日本幼児保育史』第4巻p.78))。

おわりに

今後さらに資料の収集をし、園環境として楽器がどのような意味を持っていたのか考察を深めると共に現在の幼稚園での楽器とどのようにつながって行くのかを探ることを今後の課題としたい。